

Marie de FRANCE における tutoiement と vouvoiement

本 田 忠 雄

— Tiens ! c'est vous !

— Oui, c'est moi ! ... je voudrais, Rodolphe, vous demander un conseil.

— Vous n'avez pas changé, vous êtes toujours charmante ! ¹⁾

上記の会話は *Madame Bovary* 第3部第8章で、金策に奔走する主人公 Emma が、かつての愛人 Rodolphe を訪れる場面の冒頭で交わされるやりとりであるが、この後 Rodolphe は Emma のもとを去ったことを弁解し、Emma は別離の苦しみを告白する。別れなかった方がよかっただろうという彼女に対して、「うん... そうかも知れません！」と男が答えたとき、Emma はやにわに “Tu crois ?” といいながら相手に近づき、溜め息まじりに “O Rodolphe ! si tu savais ! ... je t'ai bien aimé !” とつけ加える。Rodolphe も Emma の眼に浮かぶ涙を認めて、“Mais tu as pleuré ! Pourquoi ?” と問うが、このやりとりで気づくことは、3年間の空白を経て再会した男女が *vous* を用いて会話を開始し、ややあって *tutoiement* に変わる点であろう。この変化は、いちどは別れた2人が話している間に互いに打ち解け、かつて親密であったときと同じような心理状態になったことを示しているものと思える。

近代フランス語における *vous* から *tu*, あるいは *tu* から *vous* への転換は FLAUBERT の例にみるごとく、発話者の意図や感情の変化をもって多くの場合説明がつくのであるが、古フランス語の場合は、必ずしも簡単には解決できないものを含んでいるようである。Lucien FOULET はこれに関して、“Ce qui surprend vraiment, c'est la facilité avec laquelle

1) G. FLAUBERT, *Madame Bovary*, Paris, Garnier Frères, 1966, p. 287.

on passe du *tu* au *vous* et du *vous* au *tu*. (...) on n'attend pas qu'un jour, qu'une heure soit écoulée, c'est dans la même conversation, parfois dans la même phrase qu'on passe du *tu* au *vous* ou du *vous* au *tu*; pour un peu, on mettrait le pronom au singulier et le verbe au pluriel, ou inversement:"²⁾と述べている。FOULET 以外にも、この問題に触れている専門書は多くみられるが、その中のいくつかを紹介してみよう。

En anc.fr., on passait couramment — et sans aucune raison d'ordre affectif — du *tu* au *vous* et vice versa³⁾: (Maurice GREVISSE)

Vos est employé pour *tu* dès les plus anciens textes français. Toutefois, il faut remarquer que la vieille langue passe avec beaucoup plus d'aisance que la langue moderne, dans le même dialogue, du *vous* au *tu* et du *tu* au *vous*⁴⁾; (Arsène DARMESTETER)

Le mélange du *tu* et du *vous* 《de politesse》 n'est pas rare, même au cours de la même phrase⁵⁾: (Gérard MOIGNET)

上記のような指摘以外にも、古フランス語のこの現象に言及する研究者は多数認められるが、現在までのところ、まだ問題は決定的には解明されていない。

本稿では12世紀末の Marie de FRANCE をとりあげ、*Lais* にみられる直接話法をすべて抽出し、tutoiement と vouvoiement がどのように使用

2) L. FOULET, *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Paris, Champion, 1966, § 289.

3) M.GREVISSE, *Le Bon usage*, 12^e éd. refondue par A.GOOSE, Paris-Gembloux, Duculot, 1986, § 631.

4) A.DARMESTETER, *Cours de grammaire historique de la langue française*, 4^e partie: *Syntaxe*, 6^e éd., Paris, Delagrave, p. 55.

5) G.MOIGNET, *Grammaire de l'ancien français, Morphologie — Syntaxe*, Paris, Klincksieck, 1973, p. 263.

されているか、また *tu* と *vous* が混在するのはどのような場合かを調査し、あわせて混在の要因なども考察してみたい。もっともこの混在といった現象はかなり広範囲におよぶものであり、Marie の場合のみを調査することで、いまだ未解決の問題に大胆な結論をくだすことはできないであろう。当報告は当時の状況の一端に探りを入れることで、今後の進展に期待するものである。なおテキストとしてはつぎのものを使用した⁶⁾。

Marie de FRANCE: *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

*
* *

1 人の相手に対して語りかけるときに用いられる動詞の形態は、ラテン語では通常 2 人称単数形であったことはいうまでもない。しかしロマンス諸言語では、これがさまざまに変化したことを Kr.NYROP はつぎのように述べている。

Cet état de choses ne s'est pas conservé dans les langues romanes; il a été modifié de plusieurs manières, et on a eu recours non seulement à la deuxième personne du pluriel, mais aussi à la troisième personne du singulier⁷⁾.

2 人称複数形を 1 人の相手に対しても使用するようになる時期はかなり早く、Ferdinand BRUNOT によると、それは 5 世紀に遡る。

Pour témoigner du respect, on fait la substitution du pronom pluriel au pronom singulier de la même personne. (...) Cette 2^e personne plurielle est plus ancienne que le français. Au V^e s. de notre ère, les auteurs latins la considèrent comme une marque

6) *Les Lais de Marie de FRANCE*, publié par Jean RYCHNER, (C.F.M.A. 93), Paris, Champion, 1971 も必要に応じて参照した。

7) Kr. NYROP, *Grammaire historique de la langue française*, Tome V, Copenhague, Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag, 1925, p. 229.

de respect⁸⁾.

フランス語においてもすでに *La Vie de Saint Alexis* に *tu* と *vous* の交替は認められるが、中世全般を通じてこの2つの代名詞がとくに厳密な区別もなく用いられたことは、中期フランス語の *syntaxe* を記述した Rosalyn GARDNER および Marion GREENE の文法書からも窺い知ることができる。

In the fourteenth and fifteenth centuries *tu* and *vous* (singular) were used interchangeably. Some writers were apparently indifferent; others would show a preference for one of the two forms but with no distinction made in their use⁹⁾.

文学作品で *tu* の使用が衰微し、*vous de politesse* が優位を示すようになるのは17世紀である。これには宮廷における風習が影響しているものといわれるが¹⁰⁾、同時にこの頃より *tu* および *vous de politesse* の機能も次第に明確化し、今日のような区別が確立していったものと思える。後の大革命の時代に *tutoiement* が平等性を象徴するものとなり、公民精神の現れとして一時期これを広めようとする動きもあったが、大きな変革をもたらすには至らなかった¹¹⁾。

中世のフランス語における *tu* と *vous* の混在に多数の語学者が注目したことは前述したとおりであるが、この不可解な現象を前にして、要因を探究し解決を試みようとしたものは決して多くはない。Franz LEBSANFT はこの問題の研究を押し進めた稀少な研究者の1人であると思えるが、彼はこの分野に関する研究の経緯を“*Romania*”で詳述しているので、混

8) F. BRUNOT, *La Pensée et la langue*, 3^e éd., Paris, Masson, 1953, p. 271.

9) R. GARDNER & M. A. GREENE, *A brief description of Middle French syntax*, Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1958, p. 90.

10) cf. Kr. NYROP, *op. cit.*, p. 233.

11) cf. F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 272.

在の問題についての主なる見解をいくつか紹介してみよう¹²⁾。

まず第一に混在を論理的にも言語的にも「誤り」とする見方がある。これは Adolfo MUSSAFIA の見解であるが、彼はテキスト校訂者たちの修正を認めようとする立場にいたようである。

第二の見解は単なる「誤り」ではなく「許容の範囲内での誤り」、いわゆるレトリックでいう “*licentia*” に属するものであるとする Hugo ANDRESEN の考え方である。

Gaston PARIS は ANDRESEN の見解を否定し、混在を古フランス語における 1 つの事実とする見方を主張する。後に Victor SCHLIEBITZ も「当時におけるフランス語の状態」ということで混在を説明し、*tu* と *vous* による新しい体系が *tu* のみによる古い体系に対して完全には勝利していなかったと主張する。また後年 F. BAKOS もこの見解を踏襲することとなる。

*
* *

Marie の *Lais* にみられるすべての直接話法のうち、当報告で問題となる 2 人称形式（動詞、人称代名詞、所有詞）を含む文例が存在する個所を分類すると以下のようになる。

vouvoient (*vous* de politesse) を含む個所 94例

tutoiement を含む個所 14例

tutoiement と vouvoient (*vous* de politesse) が混在する個所 7例
なお上記の数値には、作者から読者（聞き手）への語りかけの部分や複数の人物を想定して使用されている 2 人称形式の文例は含まれていない。また発話が開始され、それが終了するまでにいくつ文が存在しようとも、同一人物の発言であれば、これを 1 例として数えたものである。

12) cf. F. LEBSANFT, *Le problème du mélange du «tu» et du «vous» en ancien français* in *România*, Tome 108, Paris, Société des amis de la Romania, 1987, pp. 4~9.

vouvoiement の優勢

Lais にみられる会話文は vouvoiement が中心をなし、tutoiement は僅少であることが前記の分類により判明したが、vouvoiement を含む文例は以下に示す94個所に認められる。

Prologue: 43~56. *Guigemar*: 311~336, 337~358, 445~453, 455~459, 501~506, 509~512, 513~526, 546~552, 553~556, 557~562, 668~673, 727~734, 791~794, 807~808, 816~819, 822~824, 836, 838~845, 847~852. *Equitan*: 117~148, 150~176, 213~220, 222~228, 241~260, 269. *Le Fresne*: 45~48, 107~116, 197~202, 277~288, 331~342, 422~426, 431~434, 461~464, 465~484, 490. *Bisclavret*: 32~36, 39~41, 42~52, 53~56, 79~86, 111~116. *Lanval*: 71~76, 110~116, 121~130, 143~150, 159~170, 263~268, 269~274, 277~286, 291~302, 363~370, 519~523. *Les Deus Amanz*: 85~116, 185~187, 200. *Yonec*: 121~134, 145~164, 177~179, 199~210, 243~252, 319~322, 401~409, 410~413, 527~532. *Laüstic*: 105~110. *Milun*: 67~86, 213~216, 427~430, 447~468, 499~502. *Chaitivel*: 189~192, 193~204, 207~228. *Chevrefoil*: 77~78. *Eliduc*: 163~164, 355~364, 367~377, 379~381, 421~430, 433~436, 450~454, 493~496, 519~530, 532~536, 633~640, 669~678, 679~682, 685~696, 727~739, 831~840, 843~846, 938~950, 1085~1102.

上記の個所にみられる vouvoiement は、そのほとんどが領主、騎士、貴婦人など王侯貴族の間で交わされる会話に認められるものであり、こういった人物たちが属するいわゆる上流階級においては、王が臣下の騎士に対するときにも、夫婦や親子の間においてさえも、特別な状況以外では通常 *vous* を用いて会話が進められている。

〔騎士 → 貴婦人〕

‘Dame,’ fet il, ‘jeo meorc pur *vus*;

Mis quors en est mut anguissus;

Si *vus* ne me *volez* guarir,

Dunc m'estuet il en fin murir.
 Jo *vus* requeor de drüerie;
 Bele, ne me *escund'iez* mie ! ' (*Guigemar*, v. 501~506)

[王 → 臣下の騎士]

'Vassal, *vus* me *avez* mut mesfait !
 Trop *començastes* vilein plait
 De mei hunir e aviler
 E la reïne lendengier.
 Vanté *vus estes* de folie:
 Trop par est noble *vostre* amie,
 Quant plus est bele sa meschine
 E plus vaillanz que la reïne.' (*Lanval*, v. 363~370)

[夫 → 妻]

'Dame,' fet il, 'u *estes vus* ?
 Venez avant ! Parlez a nus !
 J'ai le *laüstic* englué,
 Pur quei *vus avez* tant veillé.
 Desor *poëz* gisir en peis:
 Il ne *vus esveillerat* meis.' (*Laüstic*, v. 105~110)

[母 → 息子]

'Beaus fiz,' fet ele, '*avez oï*
 Cum Deus nus ad mené ici !
 C'est *vostre* pere que ici gist,
 Que cist villarz a tort ocist.
 Or *vus* comant e rent s'espee:
 Jeo l'ai asez lung tens gardee,' (*Yonec*, v. 527~532)

[父 → 娘]

'Dameisele, a cest chevaler
Vus devriëz ben aquinter
 E fere lui mut grant honur;

Entre cinc cenz nen ad meillur.' (*Eliduc*, v. 493~496)

tutoiement の使用

No.	titre	vers	locuteur → allocutaire	remarque
1	<i>Guigemar</i>	106~122	傷を負った鹿 →Guigemar	騎士への呪詛, 命令
2	<i>Guigemar</i>	134~136	Guigemar → 従僕	騎士から従僕への命令
3	<i>Le Fresne</i>	162~164	貴婦人の侍女 → 神	神への祈願
4	<i>Le Fresne</i>	420~421	Fresne の母 → 召使	貴婦人から召使への命令
5	<i>Le Fresne</i>	450	Fresne の母 → Fresne	娘を見出したときの歓喜
6	<i>Lanval</i>	535~537	妖精の使者 → 王	王への命令と伝言
7	<i>Milun</i>	169~174	Milun → Milun の 楯持ち	騎士から楯持ちへの命令
8	<i>Milun</i>	182~190	Milun の楯持ち → 城の門番	獵師を装う楯持ちの命令
9	<i>Milun</i>	192~196	城の門番 → Milun の 楯持ち	依頼に対する回答
10	<i>Milun</i>	210~212	城主の奥方 → 従僕	貴婦人から従僕への命令
11	<i>Milun</i>	435~446	Milun → Milun の 息子	命令, 質問, 感嘆
12	<i>Milun</i>	473~476	No. 11に同じ	息子を見出したとき の歓喜
13	<i>Eliduc</i>	437~448	Guilliadun → 召使	憤慨, 動揺
14	<i>Eliduc</i>	1021~1028	Guildelüec → 従僕	貴婦人から従僕への質問

Lais における tutoiement は上記14個所に認められるが, vouvoiement に比し明らかに使用の状況が限定されていることが窺える。すなわち tutoiement の多くは, 呪い, 祈り, 命令, 感嘆, 歓喜, 憤慨など, ある種の精神的動揺を伴う状況において出現する傾向があるといえよう。

[下位の人物への命令]

従僕や召使への命令には tutoiement が頻繁に認められる。

'Amis,' fait il, 'va tost poignaunt !

Fai mes compaignuns retourner;

Kar jo voldrai od eus parler.' (*Guigemar*, v. 134~136)

〔感嘆・歎喜・憐憫〕

‘*Tu es ma fille, bele amie !*’

De la pitié kë ele en a

Ariere cheit, si se pauma. (*Le Fresne*, v. 450~452)

‘E Deu !’ fait il, ‘cum sui gariz !

Par fei, amis, *tu es* mi fiz.

Pur *tei* trover e pur *tei* quere

Eissi uan fors de ma tere.’ (*Milun*, v. 473~476)

上記の2例はいずれも、生まれた直後に手放したわが子に永い年月を経て偶然めぐり会った母親および父親が感情をあらわに再会の喜びを表明する場面の *tutoiement* である。

〔呪い・憤慨〕

‘Oï, lase ! jo sui ocise !

E *tu*, vassal, ki m’as nafree,

Tel seit la *tue* destinee:

Jamais n’aies *tu* medecine ! (*Guigemar*, v. 106~109)

‘*Tu paroles,*’ fet ele, ‘en gas !

(...)

Jamés par *tei* ne par autrui,

De si que jeo paroge a lui,

Ne li vodrai rien demander; (*Eliduc*, v. 437~445)

上記 *Eliduc* の用例は *vous* を用いて会話を進めていた同一人物に対して、強い心理的動揺から突然 *tutoiement* へと変化する *Lais* においては稀少な例である。

〔神への祈り〕

‘Deus,’ fait ele, ‘par *tun* seint nun,

Sire, si *te* vient a pleisir,

Cest enfant *garde* de perir.’ (*Le Fresne*, v. 162~164)

tutoiement と vouvoiement の混在

No.	titre	vers	locuteur → allocutaire	remarque
1	<i>Bisclavret</i>	71	Bisclavret の妻 → 夫	妻から夫への命令, 詰問
2	<i>Bisclavret</i>	240~260	王の側近の賢者 → 王	命令, 進言
3	<i>Bisclavret</i>	283~292	No. 2 に同じ	命令, 進言
4	<i>Lanval</i>	491~494	妖精の使者たち → 王	命令, 伝言
5	<i>Lanval</i>	615~624	妖精 (貴婦人) → 王	事実関係の提示, 命令
6	<i>Milun</i>	36~42	Milun → 領主の娘からの使者	騎士からの命令, 依頼
7	<i>Eliduc</i>	1055~1056	Guilidelüec → 従僕	貴婦人から従僕への命令

中世のフランス語にみられる特異な現象としてのいわゆる混在例は, Marie の場合上記のとおり僅少7例に過ぎない。ここでの共通性はやはり命令法の使用であり, すべての個所にそれが認められる。

‘*Di mei, pur Deu, u sunt voz dras.*’ (*Bisclavret*, v. 71)

‘*Sire, ne fetes mie bien:*

Cist nel fereit pur nule rien,

Que devant uus ses dras reveste

Ne mut la semblance de beste.

Ne savez mie que ceo munte:

Mut durement en ad grant hunte.

En tes chambres le fai mener

E la despoille od lui porter; (*Ibid.*, v. 283~290)

‘*Amis,*’ fet il, ‘*ore entremet*

Que a m’amie puisse parler

E de nostre conseil celer.

Mun anel de or li porterez

E de meie part li direz:

Quant li plerra, si vien pur mei,

E jeo irai ensemble od tei.’ (*Milun*, v. 36~42)

La dame l'ad aparceüe;

Al vadlet crie: 'Retien la !

Getez, franc humme, mar se ira !' (*Eliduc*, v. 1054~1056)

LEBSANFT は, "Le mélange du *tu* et du *vous*, on le sait bien, n'apparaît pas chez tous les auteurs avec la même fréquence."¹³⁾と述べているが, Marie における 7 例という混在例が多いか少ないかは他の作者との比較の問題であり, 速断はできない。しかしこの 7 例という数値は, *Lais* にみられる 2 人称形式を含む直接話法 115 例中の約 6 % に過ぎないことから, Marie の直接話法の中では頻度は低いといいうるのであろう。

混在が出現するのは Philippe MÉNARD も指摘するとおり¹⁴⁾, 作者の繊細さの問題であるが, LEBSANFT は方言, とくに graphie の問題が混在の危険性を増す要素となると論じている¹⁵⁾。動詞の 2 人称単数と同複数の区別が明確な方言については問題は少ないが, これが曖昧な方言に関しては copiste がいかに反応したか, また近代の刊行者たちが写本をどう解釈したかが大いに問題となる。これら如何で逆に混在が増加することにもなりかねない。混在を惹起する危険性がある場合として LEBSANFT は, とくに 2 人称単数と複数の活用語尾が -s [s] と -z [ts] でしか対立していない場合を指摘する。北部方言でこの [ts] が [s] に変化したとき¹⁶⁾, -z と表記されていたものが -s に変わることで単数・複数は表面上の区別を失う。また [ts] が [s] に変化した後も copiste が -z の表記を放棄せず, しかも [s] を表記するにあたり, なんら語源を考慮せず -s また

13) F. LEBSANFT, *Ibid.*, p. 9

14) cf. Ph. MÉNARD, *Manuel du français du moyen âge, 1. syntaxe de l'ancien français*, nouvelle éd., Bordeaux, SOBODI, 1973, p. 76.

15) cf. F. LEBSANFT, *op. cit.*, p. 9.

16) cf. M.K. POPE, *From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman, Phonology and morphology*, Manchester University Press, 1973, § 194, § 195.

は -z を恣意的に使用するとき、混在の危険性はいっそう大きくなるが、こういった要因に基づく混在はことにアングロ・ノルマン方言におけるといわれている¹⁷⁾。また 2 人称単数命令形語末にみられる類推による -s (s analogique) も混乱の原因となるが、これはとくに複数命令形語末にも -s の表記が現れるテキストで曖昧性を惹起する。このように音韻発達など言語上の進展や graphie の習慣も *tu* と *vous* の混在を助長したと LEBSANFT は論じている¹⁸⁾。

Lais においては、音韻発達に基づく graphie の混乱に起因すると判断しうる混在例は存在しないが、写本により異なった解釈が可能となる個所が 2 例認められる。まず *Lanval*, v. 491~494 について、H 写本に基づく A. EWERT 校訂のテキストはつぎのごとく混在を提示している。

‘Reis, *fai tes chambres delivrer*

E de pailles encurtiner,

U ma dame puïst descendre:

Ensemble od *vus* veut ostel prendre.’ (*Lanval*, v. 491~494)

しかし v. 491 について、C 写本および P 写本は *feites chambres delivrer* といった variante を、S 写本は *fetes nos chambres livrer* とした variante を提示していることから¹⁹⁾、これらの写本においては混在ではなく *vous* de politesse の使用と解釈しうるであろう。また逆に *Lanval*, v. 535~537 については、EWERT 校訂版および P 写本が *tu-toiement* を提示しているのに比し、C、S 両写本では混在が認められる²⁰⁾。このようにいくつかの写本を比較検討すると、copiste たちが混在の問題に関連し異なった反応を示すことがありうる事実が窺える。

17) cf. F. LEBSANFT, *op. cit.*, p. 11.

18) cf. F. LEBSANFT, *Ibid.*, p. 19.

19) cf. *Les Lais de Marie de FRANCE*, publié par Jean RYCHNER. [C.F.M.A. 93], Paris, Champion, 1971, p. 217.

20) cf. *Ibid.*, p. 218.

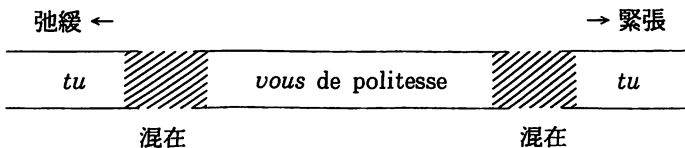
*
* *

Lais における直接話法を分析し検討を加えてきたが、以上の調査結果をもとに大略つぎのようなことがいいうるのではないだろうか。

まず *tutoiement* が使用される状況は限られており、発話者に精神的な高揚ないしは緊張が認められるとき、すなわち命令、感嘆、感動、興奮など強いインパクトをうけたときに出現する傾向がある。また *Lais* においては稀ではあるが、平民たちの交わす会話や下位のものに対する語りかけなどでも *tutoiement* が使用されることがすでに指摘されていることから²¹⁾、発話者が精神的弛緩状態にあるときにも *tu* が出現する傾向があるものと推測しうる。

こういった緊張と弛緩の間、すなわちある種の自制を伴った精神状態においては *vouvoiement* が多用されるようであり、*Lais* においてもそれは極めて広範囲に認められる。これはこの作品が貴族社会での出来事を主たる題材としていて、この階級に属する人物たちの会話が主流をなすためであろう。この社会での会話は、その中での身分の上下にはほとんど関係なく、通常 *vous* を用いて進められており、おおむね一種の自制を伴ったものである様子が窺える。

tu と *vous* の混在については、Marie の場合用例数が僅少で、調査範囲の拡大を要する問題ではあるが、下図に示すごとく発話者の心理に自制と緊張が、または自制と弛緩が微妙に交錯する状況においても出現するものではないだろうか。



21) cf. Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p. 76. G. MOIGNET, *op. cit.*, p. 262.

勿論混在の要因としては LEBSANFT も指摘するとおり、音韻発達やそれに伴う graphie の変遷、また copiste の筆写の状況、校訂者の写本解釈なども看過すべきではないが、同時に、当時の言語においては *tu* と *vous* の使用に関して明確な区別が確立しておらず、作者により前頁の図に斜線で示した混在部分が微妙に変化していたものと思える。Marie の場合は、あるいは当報告で使用した EWERT 校訂のテキストの場合は、この混在の部分が比較的小さいと結論しうる。

追記 本稿は1988年度関西大学文学部共同研究費による研究をまとめたものである。

(本学教授)